



森田子龍とスーラージュ展にみる東西 にかける“虹”（1950年代の動向から）

稲田 宗哉

『美術の窓』6月号
「視点」より転載

1952年3月18日付けのフランツ・クラインからの手紙が墨人会の機関紙「墨人」（1952年創刊）第2号に掲載された。その内容は『墨美』への賛辞とアルコプレーヤデ・クーニングら仲間の動向を知らせるものであり、また『墨美』創刊号（1951年）の表紙に掲載され特集されてからのクライン自身の作品についての内容の報告でもあった。昨年の自身の個展作品は、主に黒と白で仕事をしてきたが、森田からの手紙での指摘にもあったように、今年作品は余白の清澄度と形の単純化に工夫をかさね進展があったと思うとの親愛なる森田への純粋な手紙であった。

長谷川三郎を通じてイサム・ノグチを知りその知友であったフランツ・クラインの作品を『墨美』にとりあげることになる前、1948年創刊の上田桑鳩主宰・森田子龍編集主幹の競書雑誌『書之美』第2号誌上で東洋と西洋を両脚に踏まえて立つことを願った“虹の様に”の中の一文を見ると、マチスのデッサンの深い清浄さに感嘆し、極度に単純化し切って線へ凝縮して簡単な線に多くのものをいわせている彼の在り方と、東洋の書の線の美へのあくなき探究心があれば虹の様に何か高いところでこの西洋と東洋が一緒になる時が来ると森田は早くも夢想していたのである。

後年の作品〈虹〉・〈橋〉は森田にとって東西交流のシンボルであり、『墨美』に望みを託して30年間300号を出して東西の交流にも頑張ってきたと述懐している。

最初の書の海外進出・東西の交流の嚆矢としては、パリのクラバン画廊で開かれた“サロン・ド・オクトーブル”に出品された森田子龍作品〈無量寿〉（1951年）があげられると思う。アレシンスキーの手紙（「墨人」21号掲載一つの資料として）によるとミシェル・タピエ、シャルル・エチエンヌ、ピエール・ルーフ等が森田作品に感心し、“美術”という雑誌に“森田一沈黙に生命を付与する人一の墨は、水平的形象に於て非常に権威を以て表現されている”。と好意をもってその反響を知らせてきている。

美術史学者の中村二柄（1921-2002）（墨人会の研究会に出席して度々発言している）は「第二次世界大戦中にねざし、戦後に燃えあがった我が国の革新的な書が、1950年代に入って欧米の抽象表現主義の絵画と肩を並べて国際芸術の檜舞台に登場した一連の出来ごとは、現に我われ自身の眼前に演じられた白熱のドラマである」と言っている。



具体的に1950年代に限ってその動向を見ても劇的なものがある。

『墨美』第26号（1953年）の「書と抽象絵画・座談会」においてスーラージュの作品図版が多く掲載され、話題の中心を占めている。出席者は須田剋太、吉原治良、中村真、大澤雅休ら。

1958年来日したピエール・スーラージュ（1919-2022）とザオ・ウーキー（1920-2013）との座談会の様子を『墨美』第76号（1958年）「書とパリ画壇」として特集している。

副題は「ひとつの出会い」であり深く心に響き合った交わりといえるのではないか。

スーラージュはコレット夫人と京都を訪れ森田と面会し、食事をともにし楽しく歓談意見を交わしている動画がある。久松真一、井島勉らが同席している。

この前1955年には「現代日本の書・墨の芸術」（欧州巡回展）にも森田は図録の制作をはじめ大きな役割を担っており、バーゼルの会場では「記号絵画」としてスーラージュら他の画家の作品も別室に並べられている。また同年にはピエール・アレシンスキーが来日し、映画「日本の書」を撮影している。

1957年にはジョルジュ・マチウ、ミシェル・タピエが来日し「アンフォルメル旋風」を巻き起こしている。

欧米の前衛画家の注目は東洋の書の造形性への再確認であり、筆・墨・紙の材料そして「文字」への魅力、そして森田でいえば“いのちの躍動”、“からだの動き”、“とらわれることない自由”に目を向けたといえるし、一方“書の独自性”の問題も絡んでくる。欧米作家は「書というものに学ぶのであって、現代の書作品を問題にしているのではない」という気概と矜持をもって森田は感じ、それに対してそういう彼等をそっくりそのまま覆い尽せるような現代の書・不動の書を築き上げねばとの気概もっていた。それは1952年の墨人会創立結成の挨拶文にある「東洋の一隅に長い伝統を守り続けてきた書芸術が世界的視野において真の芸術として更生し得るか、それとも進歩的な芸術家達にその粋を吸収し去られ自滅してしまうか、いまや正にその関頭にたつに至ったということを感じ痛感するものであります。」に通底している。



1969年岩波書店「講座哲学」/「書と抽象絵画」において、森田は書と抽象絵画との違いを明確に記している。書と絵画の熱き時代は新しい転回点に立ち至ったといえる。

1958年来日のスーラージュと森田子龍その出会いから66年、東西、その「ひとつの出会い」からの歴史がここにみられる。本年2024年3月16日から5月19日まで兵庫県立美術館でスーラージュと森田子龍展が開催されている。スーラージュの想いもあってか、両者それぞれの作品が別室に交互に展示され、独自に自己を表出しながらお互いに静かに響き合っている。

美しいものは、本来、静かなるものである。森田子龍の夢に見た東西にかける「虹」は高く一つにつながり通いあっている。